

2018年8月26日聖学院教会聖日礼拝説教

「上に立つ権威」

ローマの信徒への手紙 13章 1-7節

菊地 順

今日の聖書箇所で、パウロは、「人は皆、上に立つ権威に従うべきです」と語っています。「人は皆、上に立つ権威に従うべきです」。おそらく、この言葉を聞いて、素直にそれに同意する人もいれば、逆に反発を感じる人もいないのでしょうか。反発を感じる人は、おそらく「権威」という言葉に何か引っかかるものを感じるからではないかと思えます。「権威主義」という言葉もあります。それは、大抵否定的な意味で用いられます。親の権威、教師の権威、国家の権威等々、権威と見なされるものは、わたしたちの生活の中に沢山あります。そして、その多くは、威圧的に個人の自由を制限し、押さえつけるようなものとして、しばしば感じられるかもしれません。そのため、権威という言葉を知ると、それだけで、何か反発を感じてしまう人がいるのではないのでしょうか。

しかし、本来、権威というものと自由というものは、対立するものではありません。むしろ、それは、本質的には連動しているものです。特に、聖書においてはそうです。その典型的な例は、主イエスの招きです。今日の聖書箇所からは少し離れますが、マタイによる福音書 4章には、主イエスが、ガリラヤ湖で漁をしていたペトロとその兄弟アンデレに出会われ、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と呼び掛けられると、二人はすぐに網を捨てて従ったとあります。「わたしについて来なさい」、これは権威ある言葉ではないのでしょうか。この言葉を語ることでできる人は、なかなかいないと思えます。「わたしについて来なさい」、「あなたの人生をわたしに委ね、わたしについて来なさい」、そういった言葉を語ることでできる人は、厳密には、誰一人いないのではないのでしょうか。他人の人生を生涯にわたって責任を持って担える人など、一人もいません。自分自身の人生ですらどうなるか分からないのに、他人の人生の責任を負うことなど、誰にもできない話です。もしできるとしたら、それは神のみです。わたしたちに命を与え、それを育み、生涯にわたって責任を負って下さるのは、神だけであるからです。イザヤ書 46章では、神がイスラエルの民に、「あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」と

語られていますが、この言葉を語ることができるのは、ただ神だけなのです。ただ神だけが、「あなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう」と言えるのです。そして、「わたしについて来なさい」という言葉も、ただ神だけが語ることのできる言葉なのです。その言葉を、主イエスは語られたのです。だからこそ、その言葉には権威があったのです。

しかし、この言葉に従ったペトロとアンデレは、いやいやながら従ったというわけではありません。むしろ、その言葉に全幅の信頼を寄せて、喜んで従ったのです。そして、主イエスの弟子となり、共にその福音伝道のために仕えることになったのです。そこには、完全な自由がありました。もちろん、断ることもできたのです。しかし、二人は、主イエスの招きに応じ、しかも直ちに従ったのです。主イエスの弟子となるということに、喜んで決意し、従ったのです。そこに、自由の最高の用い方があります。自分の使命とするところに喜んで身を捧げること、それこそが人間の行使し得る最高の自由です。その自由の中で、ペトロとアンデレは、主イエスに従ったのです。そして、そうした最高の自由を行使させたのが、「わたしについて来なさい」という権威ある言葉であったのです。ですから、権威と自由とは決して対立するものではないのです。心から権威に従うということは、自由の最高の行使なのです。

ところで、この権威と自由との関係には、もう一つ重要な要素があります。それは、秩序ということです。「わたしについて来なさい」という権威ある招きは、同時に権威ある命令でもあります。そして、その命令には秩序があるのです。それは、神の秩序です。そして、それは従う者の歩みを規定し、それを養い、従う者に力を与えて行きます。そのようにして、従う者は古い自分から解放され、新しく作り変えられ、その新しい秩序と使命の中で、真実の自由と喜びを持って歩み出して行くのです。それは、ちょうど、軍隊と似たところがあるかもしれません。軍隊では、従う者は上長の命令を受けて動くのです。そして、その命令に従うとき、その秩序の中で、その働きは意味と力を帯びていきます。そうした秩序が、主イエスに従うことの中にもあるのです。

おもしろいことに、福音書の中には、しばしば軍人が登場してきます。マタイによる福音書の 8 章にも、百人隊長と呼ばれる軍人の話しが出てきます。百人隊長は、主イエスに部下の癒しを求めますが、主イエスが「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われると、「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます」と答えています。そして、その理由を、こう述べています。「わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、その通りにします」。百人隊長

は、軍隊の仕組みになぞらえて、秩序を語ったのです。そして、その軍隊の秩序のように神の秩序があり、自分はその秩序に従う中で、神の恵みに与ることができる」と語ったのです。この言葉を聞いた主イエスは、大変驚き、また感心し、人々に、「はっきり言うておく。イスラエルの中でさえ、これほどの信仰をみたことがない」と語られました。主イエスは、百人隊長が、異邦人であるにもかかわらず、福音の本質を見抜いて、それをずばりと語ったことに対して、心底感心され、ほめられたのです。福音には、この秩序があるのです。そして、この秩序を知らずして、福音を知ることはできないのです。

『眠られぬ夜のために』といった本を書いたカール・ヒルティは、この秩序について触れ、大変興味深いことを語っています。それは、「キリスト教の本質をまっさきに捉えた者は、---軍人であった」ということです。そしてまた、「いつの時代も最上のキリスト者は軍人であって、決して哲学者でも神学者でもなかった」とも語っています（『幸福論』第三部、246頁）。ヒルティは、具体的には、ピューリタン革命を指導したオリバー・クロムウェルなどを念頭に置いてそう語っているのですが、そうした軍人こそ、キリスト教の本質をよく理解した人たちであったと言うのです。なぜなら、軍人は秩序に生きる人たちであるからです。そして、キリストの招きに応えることも、神の秩序に生きることであるからなのです。だからこそ、その本質に真っ先に気づき、それを受け入れたのは、何よりも軍人であったと言うのです。そして、その先駆けが、マタイによる福音書 8 章に記されている百人隊長であったのです。この百人隊長は、秩序に生きていたゆえに、異邦人であったにもかかわらず、イスラエル人以上に、福音の本質を鋭く見極めることができたのです。そしてまた、主イエスが、最後、十字架につけられ、神のみ心に従って死んだとき、「本当に、この人は神の子だった」と告白したのも、やはり百人隊長でありました。このことも、決して偶然ではないように思います。秩序に生きていた百人隊長であったからこそ、父なる神のみ心に従って死んだ主イエスを理解できたとも言えるのです。福音には、神の秩序があるのです。また、それゆえにこそ、その秩序が分からないと、福音そのものも分からないのです。そして、それは、秩序の中に身を置かない限り、本当には分からないのです。

ところで、今日のパウロの言葉、「上に立つ權威に従うべきです」という言葉は、この秩序を語る言葉でもあります。そして、その従うべき權威とは、地上の權威を意味しています。その地上の權威に従いなさいというのです。なぜなら、1 節にあるように、「神に由来しない權威はなく、今ある權威はすべて神によって立てられたもの」だからなのです。パウロは、地上の權威も、神によって立てられたものだと言うのです。だからこそ、その權威に従いなさいと語るのです。逆に言えば、地上に立てられた權威は、神に従う權威でもあるのです。

そのため、ここでパウロは、繰り返し地上の権威者について語りますが、その権威者自身が神に仕える者として理解されています。そうした神に仕える権威者の権威に、従いなさいと言うのです。そこで、大事なことは、2節に語られているように、「権威に逆らうものは、神の定めに従うことになり、従う者は自分の身に裁きを招く」ということです。地上の権威が神によって立てられたものであるならば、それに逆らう者は、神の裁きを招くのです。そして、神の裁きを招くだけでなく、地上の権威によっても裁かれるのです。また3節には、こう記されています。「実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう」。ここでパウロは、権威者を恐れないことを願うならば、善を行いなさいと語ります。なぜなら、それはまた権威者自身も望んでいることであるからなのです。すなわち、4節にあるように、「権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者」であるからなのです。逆に言えば、4節の後半にあるように、「権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです」。このようにパウロは、善を行うことによって、権威者も、それに従う者も、神の秩序に生きる者となると語ります。

ところで、今日の聖書箇所は、昔からしばしば国家について議論されるとき、引き合いに出されてきた箇所でもあります。パウロの「上に立つ権威に従うべきです」という言葉は、国家に従うべきであるとも理解できるからです。王権神授説という考えがありますが、正にその根拠ともされてきた箇所です。パウロが、「上に立つ権威」を語るとき、それは具体的な国家を指していることは明らかです。特に7節では、「貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め」なさいと語られていて、それは明らかに国家について語られたものです。そのため、昔から、権力者たちは、自分たちの権力を守るために、このパウロの言葉を拠り所としてきました。しかし、ここで大事なことは、権威者も神に従う者であるということではないでしょうか。また神に従うべきであるということではないかと思えます。そうした権威者であってこそ、「上に立つ権威」であり、そうした権威に、すべての者は従わなければならないのです。なぜなら、その背後には、神の秩序があるからなのです。そして、その秩序を重んじるということは、現代において、特に重要なのではないのでしょうか。

現代は、自由が蔓延している時代です。初めから、自由がある時代です。そして、その自由がますます増大しているのが、今の時代ではないでしょうか。逆に言えば、秩序が失われている時代でもあると言えます。人間関係にせよ、社会的構造にせよ、そこには秩序といったものよりも、むしろ混乱があるのではないのでしょうか。確かに、昔のような厳しい人間の上下関係がいいとは言え

ません。また社会的階級制度がいいとは言えません。しかし、現代においては、もっと本質的なところで秩序が崩壊してしまい、むしろ混乱と無秩序が支配しているとも言えるのではないのでしょうか。そして、その本質的な秩序とは、突き詰めて言えば、聖書が語る神と人間との秩序ではないのでしょうか。カール・バルトという神学者は、〈神は天にあり、人は地にある〉と語りましたが、そうした根源的な秩序の感覚が、今の社会にはないのではないのでしょうか。またある人は、人間の〈分際〉ということを行いました。しかし、現在においては、そうした感覚はなくなっているのではないのでしょうか。人間の分際などということすら忘れ、神をも恐れぬ生活をしているのが現代人なのではないのでしょうか。そこに、現代社会の抱える混乱の深い病根があるように思われます。そしてまた、そうした根源的な秩序についての感覚なしには、キリスト教の本質を理解するはできないのです。根源的な秩序の中で、「わたしについて来なさい」との権威ある言葉を聞かないと、その福音は分からないのです。そうでないと、その福音は、本当の解放も自由ももたらすことはできないのです。そして、そうした誤った福音は、実に安価な、安っぽいものになってしまうのです。

ボンヘッファーという神学者は、「安価な恵み」ということを言いました。信仰によって義とされると言うだけで、キリストに従うという行動のない信仰は、十字架のない信仰で、安価な恵みに過ぎずないと語ったのです。本当の恵みに至っていないと語ったのです。それは、本当に福音を理解してはいないということでもあります。信じて従うということなくして、生きた信仰はないのです。そのことを、ボンヘッファーは **Nachfolge** と語りました。この言葉は、キリストに「倣う」などと言う時に用いる「倣う」という言葉ですが、日本語ではしばしば〈信徒〉、信じ・従うと訳されてきました。そうした信じ・従うことが不可欠なのです。十字架を負って、キリストの後に従うことが不可欠なのです。そして、そのことなくして、福音を理解することはできないのです。

皆さんもよくご存じのマザー・テレサは、「貧しい人の中の最も貧しい人に仕えなさい」との神の呼びかけに応え、それに従った人です。そして、そのために、その生涯を神に捧げました。しかし、わたしたちの生活は、ともすると、その真逆になってしまっているのではないのでしょうか。神に従うことを忘れ、ただ自分の欠けたところを補うために、神の力を用いようとしているのではないのでしょうか。困難に遭遇し、不安を覚え、窮地に落ち込み、病気に苦しみ、さまざまな問題を抱える度ごとに、わたしたちは神を呼び出し、自分に力を貸して欲しい、助けて欲しいと懇願しているのではないのでしょうか。ある人は、そうした行動は、神をあたかも〈ベル・ボーイ〉として扱っているようだと言っています。〈ベル・ボーイ〉は、お客が必要に応じてベルを鳴らすと、すぐさま飛んで行ってその御用を伺い、それに応じるわけですが、ちょうどそのよ

うに、わたしたちは、いつの間にか、神を<ベル・ボーイ>のように扱い、神を自分に仕えるものにしてしまっていると言うのです。そうであるならば、そこでは、神の秩序は 180 度ひっくり返っています。そして、そこには、もはや真実の福音はなく、あるのはただただ肥大化した自我だけだということになります。

こうした時代、わたしたちは、改めて、「上に立つ権威に従うべきです」とのパウロの言葉に、真摯に耳を傾ける必要があるのではないのでしょうか。そして、上に立つ権威を与える真実の権威を見上げ、そこにある秩序を今一度明確に自覚しなければならぬように思います。そして、その権威を心から受け入れ、その秩序の中で、改めてキリストに従っていく者となって行かなければならないと思います。そのようにして、身勝手な仕方においてではなく、真実、キリストの福音に与る者となり、福音が与えてくれる真実の自由と希望に生きる者となって行かなければならないと思います。